

學會彙報

雑誌名	漢文學會々報
巻	8
ページ	110-113
発行年	1938-11-20
URL	http://hdl.handle.net/2241/00146884

學會彙報

昭和十三年度漢文學科講義題目

穀梁傳注疏演習

儒教概論

論語正義演習

儀禮注疏演習

古禮解說(祭祀)

段注說文解字演習

支那文學概論

日本漢文學史文華秀麗集及經國集

本年度卒業生卒業論文題目

日本經學史

春秋公羊傳及び公洋學の研究

論語に關する研究

周易占筮考

春秋穀梁傳の研究

朱子の研究

儒教より觀たる水戸學の研究

諸橋 教授

諸橋 教授

諸橋 教授

内野 教授

内野 教授

内野 教授

鹽谷 講師

小野 講師

尾關富太郎

佐川 修

佐田 弘道

田口 聖一

富山 昇

林 宇三郎

古澤未知男

本年度學會委員氏名

庶務部 米山寅太郎

會計部 米山寅太郎

研究部 陳蔡 棟昌

編輯部 田口 聖一

岩佐 貫三

須藤 功

尾關富太郎

高橋 俊英

荒井 榮

大島 一

古澤未知男

附記(助手鎌田正氏附中助教諭榮轉につき後任米山氏)

そのまゝ後を承く)

春季講演會(第一回)

四月三十日(土曜日)午後一時より新館本部會議室に於て開催す。

内野、熊坂先生、田沼、小林、小島、渡邊、上島、飯田の諸先輩を始め、學生、生徒滿堂の盛況なりき。

一、開會之辭 助手 鎌田 正氏

一、北支學界の近狀について 會長 諸橋 教授

一、閉會之辭 學生 古澤未知男君

右講演終了後、午後五時より茗溪會館に於て新入生歡迎を兼ねて晚餐會を催す。

講演要項は次の如し。

自分は事變下の日支國交調整は、東洋思想の高揚闡明

にあり、それには多年斯道に携はる自分にも責任があると感じ、文化人の聲を聞かうと思つて北支に渡つた。然し事變勃發と同時に國立大學は南方に移され、北京には中等學校以上では學校らしいものもなく、新民學院、師資講肆館の如きも前者は官吏養成、後者は教員養成の目的で不備なもので落膽した。新民會の如きも主義、主張不十分で若人を惹きつけるには微弱なものである。滯在中會見した百五六十人の人の意見を大別すれば、次の三種となる。甲類、周圍の反對を顧みずして敢て出馬し日支提携に盡したい。乙類、文化人の努力は戦争の前には無駄である。今行動するのは事態を悪化せしむるのみだから、動かざるに如かない。丙類、今度の戦は全面的日支戦である。文化工作は尙早である。終了後になすべきである。以上の外の人で嘗ての大官には時局談に觸れることを避け巧みに書物の話に紛らす人もあつた。現臨時政府要人の如きも口を揃へて方針は日本と一致させるも、支那固有の點は認めて細部は自分等に任せて欲しいと云ふ意見であつた。或は又、後から詩を寄せ或は筆談の際對聯を示して心境を示した人もあつたとて實物を示された後次の如く結ばれた。文化工作は容易なことではないと思つて最初失望したが、考へると、その困難は一、戦争は非常のことであり、文化や教育は常時を標準とする。二、日支兩國人には相容れない相違がある、この二原因

によるやうである。されば徒に失望落膽することなく、不撓の努力を以て、東洋の眞の平和の目的の爲に文化工作を計畫しなければならぬ。

春季第二回講演會

六月十八日午後一時より漢文第一研究室に於て開催す。峯間先生、渡邊、上島、小島諸先輩を始めとし、外部の聽講者も多數ありき

一、開會之辭

學生 尾關富太郎君

一、佛教思想の特徴

高神 覺昇氏

一、閉會之辭

學生 古澤未知男君

一、謝辭

會長 諸橋教授

右講演終了後、座談會開催。更に懇切なる指導を受く。講演要項左の如し。

佛教とは縁起の哲學である。即ち因縁と縁起との哲學にして因が元で、縁が仲介となつて果を起す。而して萬物は因と縁との結合、和合によつて生ずるものであるとて因縁の理を説明し、次に佛教に三寶と稱するが即ち佛（覺者）法（眞理）僧（和合の衆）の三者をさすものにして、佛教とは佛陀即ち覺者の教にして且つそれは法の教なりと説き、釋迦は人の子であるが、法を悟ることによつて佛陀になつた人である。而して法は豎横に彌漫してゐるものであり、縁起である。次に釋迦の當時、三つ

の哲學、一、尊祐論(神意論)、一、無緣論(偶然論)、三、宿作因論(運命論)があり、佛敎は第一の立場をとるところの緣起的人生觀である。これから三法印、即ち、諸行無常、二、諸法無我、三、涅槃寂靜が生れる。諸行とは現象であり、無常とは流轉である。諸行無常によつて生死の諦觀が生れる。諸法は諸行と同じく、我とは常一主宰、無我とは普遍の衆力である。寂靜とは悟りの世界、涅槃とは不滅の世界である。無常なるが故に必ず生かさねばならぬ。その生かす世界が涅槃である。即ち、智目(思想即ち哲學)行足、(實行即ち宗教)以て清涼地(悟りの世界)に至るのである、と説き來つて、次の如く結ばれた。宗教は如何に生くべきかを教へる。それが爲には死を觀るべきである。それには生を見直さねばならぬ。即ち科學的認識より哲學的認識へ、更に宗教的認識へと至らねばならぬ。

第廿回研究發表會

十月十五日(土)午後一時より新館會議室に於て行ふ。會長大阪漢學大會出張の爲臨席なし、田波、小島、兩先輩來會さる。

一、閉會之辭

學生 大島 一君

一、之八について

田口 聖一君

一、新注の傳來と其の前後

尾關富太郎君

本學教授 内野 先生

學生 須藤 功君

一、批評
一、閉會之辭
終つて茶話會を開く。

東京文理科大學漢文學會會則

- 一、本會ハ東京文理科大學漢文學會ト稱シ、事務所ヲ東京文理大學漢文學研究室内ニ置ク
- 二、本會ハ漢文學ノ研究及ビ普及ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 三、本會ノ會員ハ左ノ人々ヲ以テ組織ス
 - 1 東京文理科大學及ビ東京高等師範學校漢文學科關係ノ教官並ニ講師
 - 2 東京文理科大學漢文學科生及ビ卒業生
 - 3 東京高等師範學校文科第二部(國漢)生徒及ビ卒業生中漢文研究ニ篤志ナル者
 - 4 其ノ他ノ漢文學研究ニ篤志ナル者
- 四、本會ノ主ナル事業左ノ如シ
 - 1 研究發表會
 - 2 講演會
 - 3 研究旅行
 - 4 雜誌發行
 - 5 其ノ他必要ナル事項
- 五、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 1 會長一名
 - 2 顧問若干名
 - 3 評議員若干名
 - 4 委員十名
- 六、會長ハ本會ヲ代表シ、會務ヲ總理ス
顧問ハ會長ノ諮詢ニ應ズ
評議員ハ評議員會ヲ組織ス
評議員會ハ會長之ヲ召集シ、重要ナル會務ヲ議ス
會長ノ委囑ニヨリ評議員中一名ヲ會計監督トス
委員ハ會長ノ指示ヲ受ケ、會ノ研究、會計、編輯ノ事務ヲ分擔ス
- 七、會長ニハ東京文理科大學漢文學科主任教授ヲ推ス
評議員ハ東京文理科大學並ニ東京高等師範學校漢文學科關係ノ教官講師及ビ其ノ他ニツキテ會長之ヲ委囑ス
顧問ハ評議員會ニテ之ヲ推薦ス
委員ハ東京文理科大學漢文學科學生中ヨリ六名、其ノ他ヨリ四名、會員ヲ互選ニヨリテ選出シ其任期ヲ一ケ年トス、但シ重任ヲ妨ゲズ
- 八、本會會則ノ變更ハ評議員會ノ議決ヲ經ベキモノトス
- 九、會員ハ會費年額二圓ヲ納ムベキモノトス

以上